

「リア王」における選択の意味

市 居 米 子

人生はさまざまな〈選択〉の積み重ねで成り立っていると言いうるだろう。人は人生の道程において判断をし選択し決定しなければならない。そしてその結果のすべてを自らの責任として引き受けてゆくことになる。選択しながら自らの人生をつくってゆくことが求められているのである。しかし人ははたして選択の場において全く自由なのであろうか。人々の動機には必然性が介入する余地はないのだろうか。老王リアもつねに自らの意志で、可能性の中から一つを自分の生き方として選んでゆく。が、しかし彼はその決定の場において完全に自由なのであろうか。彼は「わしは罪を犯すよりも犯された人間だ」⁽⁴⁾ (Ⅲ. ii. 59) と叫ぶが、その叫び声はこの選択をめぐる人間の意志と神意の相克を示差しているのではないだろうか。「リア」の中よりおもな場面をとり出し、その視覚的效果に注意を払いながら、「リア」が私たちに語りかける〈選択〉の意味について考えてゆきたい。

私たちは「リア王」の壮大な幕あけにこの〈選択〉のモチーフが呈示されるのを見る。老王リアが言葉で表現される愛情を目安に王権と全財産を三人の娘たちに譲ろうとするのである。姉娘のゴネリルとリーガンは「人におもねる目つきやおせじを言う舌先」で父王の領土と財産を譲り受けるが、末娘のコーディーリアは「愛して、黙ってい」ることを選ぶ。彼女にとって愛情は言葉で表現されるものではなく、行動であらわすものなのである。その結果彼女は追いつめられはするが愛の強さ故に「言うことはなにも」(“Nothing, my lord.”) (I. i. 86) と答える。彼女を一番かわいがり彼女のやさしい手に余生をゆだねるつもりであった

リアは、自らの愛が裏切られた上に、全廷臣の前で恥をかかせられ激怒する。「龍の怒り」にかられたリアは、コーディーリアに対して持参金代わりに呪いを浴びせ、彼女にと留め置いていた領土を姉たちの領土につけ加えることを宣言する。しかも彼は怒りにまかせて諫止しようとした忠臣のケントをも追放に処する。コーディーリアの真実は誰の目にも明らかである。それは彼女の傍白——「ああ、あわれなコーディーリア！ いえ、あわれじゃないわ、私のお父様への愛はあわれな舌などおよばぬほど深いのだから」(I. i. 75)——という言葉からも、又彼女のおそらく着ていたと思われる白のコスチュームという視覚的な効果からも、また一人の男性と三人の女性というパリス以来の選択の原型的パターンの呈示からも十分に感知できる。そして観客は一人残さずやがて起ることを感じるのである。リアの絶対権力故に曇った目のみが真実を見ることができなかつたのである。人生における選択、人間の実存に決定的な影響を与える原型としての選択の場において、誤まった選択をしてしまったリアは、その過誤の代償をこの上もなく高く支払うことになる。彼はコーディーリアの“Nothing”という返事に怒りを爆発させて、

Nothing will not come out of nothing (I. i. 89)

と叫ぶが、彼はまもなく王位を失い、王権のシンボルである百人の騎士を失い、宿るべき住処ももたない狂った老人として、「無」^{ナッシング}の境涯におちいらねばならなくなる。

この選択のモチーフは以後もくり返し形を変えてあらわれる。グロスターは不実な庶子エドマンドを信頼し孝心厚い嫡子エドガーを追放する。ケントはオズワルドを敵しく非難しその結果コーンウォールによって弾劾される。道化の鋭い皮肉は冒頭のリアの愚かな選択を思い起こさせる。ゴネリルとリーガンは手を組んでリアの我儘を非難し、リアは偽わりの裁判で二人を裁こうとする。そしてこの選択のモチーフは劇が急展開するとともに激しさを増す。コーンウォールはグロスターを尋問し罰として目をえぐりとる。エドマンドはリアとコーディーリアに

死刑を宣告し、そしてエドガーとオルバニーによって裁かれ、エドガーとの決闘に敗れ死ぬ。緊密度を増しつつあった選択のモチーフは最後の場において頂点に達し、神々による選択というアダム以来の根元的なモチーフが呈示される。神々は果たして何を罰し、誰を嘉したもうたのだろうか。神々は「この世の終わりの日の恐ろしい幻影」を示そうとしたか。あるいは「慰めとてない暗闇の死の世界」のかなたの救いのかすかな光を暗示しようとするのか。答えを出すためにまず各人の選択の結果を見る必要があるだろう。

冒頭のリアは王冠をかぶり 豪華な衣服を身にまとい多くの廷臣にかしづかれた専制君主として姿をあらわす。しかし、三幕のリアは自らの選択の結果、以上のすべてを失っている。私たちはすでにゴネリルとリーガンの同一性と、彼女たちが異なると思っていたリアの愚かさを呈示するリアの眼前で二人が手に手をとる姿と、彼の無への可視化とも言うべきゴネリルとリーガンによって、おつきの騎士の数が百から五十、二十五、十、五、零へと削減されてゆくを見てきた。そして王の使者でありながら辱しめを受け、一夜足枷をはめたままグロスターの居城の前で過す忠臣ケントの姿は、来たるべき王の受難の予表でもあり、力を奪われた美德の呈示でもあったのである。そして三幕のリアは雨のもらない家でおせじの甘い水をもらうより、「外で雨水にぬれる」ことを選び、そのみじめな結果を背負っている。姉娘たちの亡恩に激怒し嵐が荒れ狂う荒野へと飛び出したリアは、帽子もかぶらず雨をしのぐ住処もない、つき従うものとして道化しかいない一人のあわれな老人として、嵐の中をさまよわねばならない。この嵐の場においても他の「リア」の場面同様、観客はどの人物の意識の中にはいりこむことはない。リアの怒りの巨大さ愚かさ、道化の辛辣さと御都合主義、エドガーの癡狂という仮面は観客の特定人物との同化を邪げる。観客はどの人物に対しても等距離を保ちつつ、一歩さがって事件の展開を見ることを余儀なくされる。一歩下がって場全体を見まわすと、最近まで王であった男が、狂人と乞食を共に嵐の中を裸足でよろめきながら、ときに怒りを爆発させ、ときには自らを責め苛む姿が浮かびあがってく

る。

Lear. Dist thou give all to thy daughters?

And art thou come to this?

Edgar. Who gives any thing to poor Tom? whom the foul fiend hath led through fire and through flame, through ford and whirlpool, o'er bog and quagmire; that hath laid knives under his pillow, and halters in his pew; set satsbane by his porridge; made him proud of heart, to ride on a bay trotting-horse over four-inch'd bridges, to course his own shadow for a traitor. Bless thy five wits! Tom's a-cold. O! do de do de, do de. Bless thee from whirlwinds, starblasting, and taking! Do poor Tom some charity, whom the foul fiend vexes. There could I have him now, and there, and there again, and there.

(Storm still)

Lear. What! has his daughters brought him to his pass?

Couldst thou save nothing? Would'st thou give'em all?

Fool. Nay, he reserv'd a blanket, else we had been all sham'd.

Lear. Now all the plagues that in the pendulous air

Hang fated o'er men's faults light on thy daughters!

Kent. He hath no daughters, Sir.

Lear. Death, traitor! nothing could have subdu'd nature

To such a lowness but his unkind daughters.

Is it the fashion that discarded fathers

Should have thus little mercy on thier flesh?

Judicious punishment! 'twas this flesh begot

Those pelican daughters. (III. iv. 48)

二人の供の男は王と相通じる経験を経てきて、王の悲しみ、屈辱、怒りと類似する体験をもったはずである。が、しかし彼らは王に同情の片鱗も見せず、過去の愚行、現在の惨めさを揶揄する。王の苦悩が凝縮された「二人の娘にすべてを与えてしまったのか?」という問いかけに、道化は世俗的な次元の知恵から、王の真剣な人間探求を批判し、その奥にひそむこっけいさを苛酷に暴露する。リアのあるときには宇宙的な次元にまで拡大し、またあるときには魂の奥深く凝縮する怒りの傍らにあって、道化は彼の怒りの発端がきわめて日常的な次元にあること、

彼の現在の不幸は仮の愚かさが招いた当然の帰結であることを執拗に示してきた。今、彼はリアの怒りと現実とのずれを辛辣に残酷に諷刺する。

エドガーもリアと類似した境遇にある。グロスター伯の嫡男として生れながら異母弟のエドモンドの奸計に陥り「無」の境涯に落ちた彼は、生きのびるために気違いトムに変装し、村から村へ鞭で追い立てられながら、牛の糞やドブネズミや犬の死体を食べねばならない。人生の酸鼻の極をなめつくした彼の肉体は、実生活の暗黒面をリアに呈示し、それがため彼はリアから哲学者先生フィロソファーと呼ばれた。今、彼は自らをリアの戯画として呈示しながら、リアの現在の愚かさを断罪する。「おまえも娘にすべてを与えてしまったのか？」という父親としてのリアの問いに対し、息子として彼は「何か恵んでくれる人はいないかね。」と答え世代交代を暗示する。そして亡恩に憑かれたリアの姿を悪魔に引きずりまわされている自分にたとえる。ついで陰謀を示唆し（短刀をしのばせたり……）、慢心を戒しめ（あいつはおれを増長させ…）、リアの理性が失われようとしていることを指摘する（正気を失わないよう祈るぜ）。リアの自己憐憫はエドガーの「あわれなトムだよ、お恵みを」という言葉によって、自らの魂の内奥に自らが呪咀している罪の源を認めるリアの原罪意識は、エドガーの「ここだーそら、ここだーそら、ここだ」と体のあちこちをつつつきまわす動作によって視覚化され愚弄される。そしてエドガーはリアの苦難に対して、現実的な因果律をもちだし警告する（つむじ風にあたり……、及び77-80行参照。）リアの苦悩の原点であり模索の出発点である娘の亡恩についての問いかけにリアより追放された後、変装して「奴隷さえ恥じる奉公」ステーションビクテニアをしているケントですら反撥する。この嵐の場を劇的絵画として見るとき、リアの孤独と惨苦が伝わってくる。自らの意識の一部と思えるほど近似したものから、責め苛さいなまれ愚弄されるのである。しかもその愚弄は理性のあらわれである言葉、logos の意味の喪失という形すらとる。人間と獣を区別する言葉ロゴスがリアの苦悩を嘲笑するかのよう脈絡のない断片的なイメージの積重ねと化し、不協和音へと転じてゆくのである——「一人苦しむものこそもっとも苦しい思いをするのだ」（Ⅲ．Vi. 103）。

リアは物質的・社会的に下落してゆき、外面的付属物を加速度的に失ってゆく。彼がエドガーの裸に触発されて衣服を脱ごうとするのは、彼が王としての身分は もちろん人間存在につきまとう装飾物を自らの意志で捨て、自らの意志で無に近づこうとする象徴的な行為である。しかし彼は外面的に無になるに従い精神的に成長してゆく。彼は道化をいたわり、社会の不正、不平等を告発し、人間の惨めさに気付いてゆく。リアは外面的付属物を失えば失う程、社会の不正、人間の醜悪さに、宇宙の不可測性に気付いてゆく。そして彼が気付き目覚めた真実は彼の外面的付属物を容赦なくむしりとり、彼の精神をかりたて苦しめる。リアにとって知ることはアダム 同様苦しむことなのである。そしてこの苦しみがもしこの場を一步下がって一幅の絵としてみて、言葉の不協和音に圧倒されるままになるなら、私たちに伝わってくるのではないだろうか。舞台上にくり広げられた地獄絵図は、そのままリアの苦しみの客体化と言えるだろう。私たちは、リアの心の痛みを「知る」のではなく「感じる」のである。

嵐の場を経て文明の象徴である裁判という形で自らの怒りを解決しようとするリアの試みが、むざんに失敗する農家の場を最後にリアは姿をくらます。再び私たちがリアの姿を見るのは、ドーヴァーの野で大声で歌い、頭には雑草の冠をかぶった狂った老人としてである。彼の娘の虚偽と亡恩に対する、また虚偽と亡恩に満ちた社会に対する、そしてその娘たちを生み出した大自然に対する怒りは、ついに彼の理性を破壊してしまったのである。彼の無惨な姿を見て、民衆の声の代表者である一紳士は嘆く——「どんな卑しいものでもあのような姿を見るも痛ましい、まして国王の身であれば言葉もない！」(IV. vi. 201)しかし彼は発狂しつつも、自分が発狂しつつあることを知っていたし (I. V. 43, II. iv. 216, III, ii, 67参照)、何故そうなったのかを知っている(「ああ、そう思うと気が狂う」)(III. iv. 21)。彼の狂気の特徴は、盛田氏が言うように「理解力の一つの極端なタイプであり、狂気の中で、正気のときに抑圧されていた想像力が自由に働いて、それなりに首尾一貫したヴィジョンを形作っている」⁶⁾ことであろう。彼のこの狂気ゆえに^{とぎ}

すまされた想像力は、社会の洗練と退廃に、また人間の穢れと情欲に直面し、その根源的な醜悪さを捉える。「雪のように清浄」な顔をもった貴婦人も、帯からは「燃えあがり、焼きこがし、悪臭を放ち、腐りただれ」た地獄であり、暗闇、「硫黄の穴」である。その姦通者と「作り笑いの貴婦人」の社会において、権威が巨大な姿をもち、役職にある犬は人間を従わせることができ、田舎役人は自分が鞭打っている売春婦に欲望を感じ、「高利貸しはさき師を絞首刑にし」、「法衣や毛皮のガウンがすべてを包みかくす」。もはや無垢の人間は存在しないので、すべての罪人は許される社会なのである——「罪人など一人もおらぬ、一人も、いいな、一人もだ、わしが保証する」(Ⅳ. vi. 165)。私たちはすでにグロスターの目がえぐりとられる場と、ゴネリルとエドマンの不倫の恋の場を見てきている。この二つの暴力と肉欲が呈示された後、リアの告発は狂人の奇矯な言葉あるいは個人的な怨恨に留まらず、一層普遍的な怒りとして私たちに訴える。

そして観客に「自然の傑作」たる王の姿が示される。故国の象徴、国民の幸福とアイデンティフィケーションの指針、そして政治、文化、道徳の規範であったその王の廃墟と化した姿が、舞台の上に呈示される。リアは嵐の夜、寒さに震えるエドガーの姿を見て「人間とはあわれな裸の二本足の動物にすぎぬ」ことに気付いた。が、今彼はまさに狂った老人として「裸の二本足の動物」に、ヤン・コットの言う〈自然の破片〉に化したのである。

私たちはすでにこの人間の卑少さを強調し、普遍化する副筋の物語を見てきている。副筋の主人公グロスターはリア同様誤った選択をする。孝心厚いエドガーを勘当し、腹黒いエドマンドを厚遇する。彼の誤った選択は両眼という高い代価を要求する。彼はゴネリルの夫コーンウォールによって裁かれ熊いじめの熊同様、椅子に縛りつけられ目をえぐりとられる。この場面の陰惨さは人間の極限的な状況に対する神々の沈黙を伝える——「無事に長生きしたいものは助けてくれ！うう、なんてひどいことを！ああ、神々」(Ⅲ. vii. 6.7)。彼は慰めとてない闇の世界の中をエドガーに手を引かれて巡礼の途にのぼる。彼の人生における選択はリアとは対照的に、周囲の人々の意志に弄ばれての選択であった。彼の救いにいた

る道も又、息子の先導の手に委ねられている。ブリューゲルの《盲人》の絵さながら、気ちがい乞食に手を引かれた盲人があてもなくさ迷う有様は、人間を生殺与奪のすべてを神々の手に握られた虫けらと思わせる。彼は呟く——「神々の手にある人間は腕白どもの手にある虫だ、気まぐれゆえに殺されるのだ」(IV. i. 36)。

副筋が本筋の主題を単に反復する効果について、ブラッドレーはそれは「悲劇の苦痛を単に二倍にするだけでない。リアの愚かさや娘たちの亡恩が、偶然の出来事や単なる個人的な錯誤でなく、この暗い冷たい世界にはある宿命的な邪悪な力が広く流布している」⁽⁶⁾ことを暗示すると述べている。そしてこの邪悪な力が親子兄弟の心を離反させ、互いの死を求め、「眼をえぐり、頭を狂乱させ、憐れみの泉を凍らせる」⁽⁶⁾と彼は言う。確かにグロスターの出現はダブル・プロットの効果という観点からも、また、グロスター自身の姿からも人間は神の意志のままに弄ばれるあわれな存在であることを伝える。エドガーによってドーヴァーの崖の上と思こまされたグロスターは平地の上で身を投げ、再び姿を変えたエドガーによって助け起こされ、自らの生を確かめ嘆く——「不幸な人間は、死によって不幸を終わらせる恩恵まで奪われておるのか？」(IV. vi. 61) このグロスターがドーヴァーの野で狂ったリアと出会う。

Lear. I remember thine eyes well enough. Dost thou squiny at me?

No, do thy worst, blind Cupid; I'll not love. Read thou this challenge; mark but the penning of it.

Gloucester. Were all thy letters suns, I could not see. (IV. vi. 134)

狂った王と、両眼をえぐりとられてぼっかり穴のあいた^{がんか}眼窩をもったグロスターが向かいあっている。この一幅の劇的絵画は言語が語りうる以上のことを人々に伝えるのではないだろうか。人間は卑しめられ、いたぶられ、世界は解体し崩壊してしまったということを思わしめるのではないだろうか。

神々は人間に自由意志を与え、選択の場を持つことを許しておきながら、帰結のすべてを熟知しているのではないか。神々の全知に逆らうことがどうして人間にできよう。「楽園喪失」の主題が甦ってくる瞬間である。リアは叫ぶ——「助け

るものはおらぬか？ 捕虜になるのか？ わしは生まれながら 運命にもてあそばされる道化だった」(Ⅳ. vi. 188)。彼はゴネリルとリーガンが力を合わせて彼に反抗したとき「神々よ、忍耐を与えたまえ、私に必要な忍耐を」(Ⅱ. iv. 269)と叫んだ。その時の忍耐は腐敗した世界でわが身におこる暴力行為を耐える能力と考えられていた。今、彼は盲目のグロスターに「忍耐せねばならぬぞ。人間、泣きながらこの世にやってくる」(Ⅳ. vi. 180)と語る。そのときの忍耐は人間であるという事実^④に深く根ざした苦しみに耐えることに深まっているとマックは言う。④ かつて彼は自らを「黒い髭も生えぬうちから白い髭を」持っている賢人と思っていたが、「嵐の中でずぶぬれになり、風に歯の根も合わなかったとき」、そして彼の命令で雷が静まらず、癩^{おこり}を防ぐことができなかつたとき、彼は神々の力を悟ったのである。そして彼は、今、人類の王として苦難に向う忍苦の道を説いているのである。神々の意志のままに弄ばれる人間の滑稽で苛酷な運命に耐える聖者的忍苦の道を教示しているのである。

「理性はそれ自身の言語をもつが、情緒はその本性からして言語化できない面をもっている」⑥ とは五幕以降の「リア」を語るにあたってまことに適確な言葉と言いうる。すべての人物はそれぞれの賞罰を得て、物語が大団円に向うように見えた時——コンウォールは部下に殺され、弱肉強食の人生哲学を力強くうたって登場したエドモンドは、一個の計算高い卑劣なマキャヴェリアンに墮し、エドガーに決闘によって倒され、情欲と生殖の因果関係によって手酷い罰を受け闇の世界の中をさまよってきたグロスターは、エドガーにふれる喜びを苦難の旅の報いとして得て喜悅のうちに死ぬ。ゴネリルとリーガンはエドモンドをめぐる肉欲の争いのうちに互いに殺しあい、エドガーは辛い試練を経て、リアへの同情、父親の救済の仕事のうちに、自らのアイデンティティを見出し社会に復帰し、(First Folio によれば)王位を継ぐことになる——このすべてが、現実界の因果律にしたがって帰結しようとした瞬間、オールバニーの「姫が御無事でありますよう！」(The Gods defend her!) (Ⅴ. iii. 254)という言葉に対して「死んだコーディ

ーリアを抱いて登場」というリア像が答える。これ程明確に視覚表現がすべてを語る場面はないであろう。

18世紀における大覚醒運動の指導者であり神秘的体験の持主であったジョン・エドワーズは悠大な自然の上に広がる空や雲を仰ぎみた瞬間、神の威厳と恩寵グレイスの甘美な結合を理解するが、私たちがまたコーディリアの中に威厳と優しさ、正義と愛が見事に融け合っているのを見る。愛は甘美なものであるが、また同時に厳しく激しいものである。愛するゆえにリアの言葉による選択に妥協するのを拒んだコーディリアは、結果としてリアを荒野へかりたてることになる。しかし愛はまた同時に悩めるものに救いの手をさし伸べる。絶対的な愛の化身のみが、狂乱の嵐の中で「地獄の火の車」に縛りつけられていたリアを救い出すことが可能だったのである。姉たちによって呪咀の対象となっていた大地は、彼女によって心正しいものの悩みを救う薬草を生み出す恵み深い母なる大地へと代わり、彼女とリアが再会する時は、清らかな喜びと安らぎが満ちわたり、今まで打ち続いていた憎悪、陰謀、私刑、姦姪、発狂の暗く陰惨な場面の上に、まばゆいばかりの光を放ちさん然と輝く。リアのみならずリアの周囲の人々にとっても観客にとっても、彼女は精霊スピリットであり「天国の靈魂」だったのである。そして彼女によってリアは自分の存在のすべてをかけて人を愛することを学び—「毒を飲めというなら飲もう。」(IV. vii. 72)、それと同時に自らのアイデンティティーを回復する—「わしは愚かな、愚かな、老人にすぎぬ」(IV. vii. 60)。戦敗れて囚われの身となったリアはコーディリアとともに「籠の小鳥のように、歌って暮らそう」として、嬉々として牢獄に向ったのである。

両腕にコーディリアの死体を抱いて登場するリア像は、リアの苦難の旅路のすえに見出した至福の時間がすべて潰えさったことを告げる。彼は再び無となったのである。彼のなめた苦しみは全く償われることなく、彼は愛するものを失うという苦しみを知らぬためにのみ、理性を取りもどし人を愛することを学んだのである。しかもリアにはハムレットやオセローのように独白によって自らを語りながら死ぬことも、マクベスのように戦いのうちに死ぬことも許されていない。彼

は心の中にコーディーリアが生きている望みをよみがえらせながら死ぬ——「これが見えるか？ 見ろ、この顔を、この唇を、見ろ、これを見ろ！」（V. iii.3 09）このもっとも悲劇的な瞬間に愚かしい錯誤が混ざること観客を当惑させる。今までリアに集中し、リアの心の中に深くはいりこんでいた人々の視点は、この時リアから離れてゆく。一步退ぞいた観客は舞台全体を見まわす。そこに浮びあがるのは一人の老人が今までの辛惨を体のにじませながら娘の死体を抱き、老人と娘を崇め敬う人々も自分たちの苦しみ能耐えつつ二人を見守る構図である。この「リア」の最後の場も一つのピエタなのであろうか。言葉はきれぎれで短かくリアの耐えた苦しみを、「つらいこの世の拷問台」の上で何を見たかを語ることはない。しかし劇的絵画がより鮮かに語りかけているのではないだろうか。彼のヴィジョンがエドガーの「神々は正しく裁かれる」（V. iii. 169）やオールバニの「それこそ天に神々のいます何よりの証拠だ」（IV. ii. 78）をはるかに越え、エドガーの「機^{ライブネス}の熟するのを待つ覚悟がだいじです」（V. ii. 11）を経て、はるか遠く深く達していることをこのピエタは伝えているのではないだろうか。神々の非情な裁きに対してオイデプスは目をついた。神によってあらかじめ決められていた罪を犯した彼は、自らの意志の上では完全に潔白であったにもかかわらず、自らの行為に対してどこまでも責任を負おうとするのである。そして神の全知を裏切らず自由意志で禁断の木の実を食べたアダムは、神の前にひざまずいて恕しを乞う。リアはカオスの世界を根本的にカオスと体験し、カオスの中に人間存在の意味を問うているのではないだろうか。生の無意味の深淵を越えてまでも生に直面しようとしているのではないだろうか。リアは生の苦しみにもっとも弄ばれもっとも年老い、そしてその苦しみにもっとも耐えたのである。リアがみて学んだことは老いさらばえたリアの肉体とともに葬り去られる。残された私たちにできることは「この悲しい時代の重荷に耐え」「感ずるままを語り合う」ことだけであろう。

嵐の場、ドーフターの野原の場、最後の場という三つの主要な場面をとりあげ、言葉が語りかけるものと視覚に訴えるものの両者を探りつつ、「リア」のヴィジョ

ンに触れてきた。シェイクスピアの他の作品同様「リア」の世界にあっても、言葉が主要な効果を挙げていることは確かである。「詩」の力によって私たちは舞台上に豪華な王国譲渡の儀式、嵐が荒れ狂う荒涼たるヒースの野、そして海岸にそびえたつドーヴァーの崖を見てきたのである。言葉によって私たちはリアの怒り、コーディーリアの嘆き、エドモンドの悪の哲学、ゴネリルやリーガンの肉欲を理解してきたのである。しかし劇の進展につれ、人々の感情が白熱し、経験が言語を越えるとき、視覚表現が効果的に用いられ、観客の心に深い陰影を落とすのである。視覚というより直接的な手段によって、私たちは各場の意味により深く関わることができるのである。両者がシェイクスピアの天才とも言うべき技巧^{アート}によって見事に融合し、「リア」の壮大で神秘的なヴィジョンを構築するのである。そしてその壮大で神秘的なヴィジョンはリアの苛酷な道程を通して、私たちがいかに生きるべきか示しているのではないだろうか。

- 註(1) テキストは The Arden Shakespeare *King Lear*, ed., Kenneth Muir 使用。訳は「シェイクスピア全集V」小田島雄志訳（白水社，1979）による。
- (2) 盛田寛一「『リア王』と現代」p. 231 「シェイクスピアの演劇的風土」シェイクスピア協会編（研究社，1977）所収。
- (3) A. C. Bradley, *Shakespearean Tragedy* (Macmillan press, 1971) p. 262.
- (4) Maynara Mack, “*King Lear*” in *Our Time* (University of California Press, 1972) p. 111.
- (5) 盛田寛一, p. 223.